

テキスト構造の観点から見た大過去形
— 回想の半過去形に埋め込まれた大過去形 —

宮脇玲奈

0. はじめに

◆ 渡邊 (2018)

フランス語の大過去形は他のロマンス諸語と比べて使用頻度が高いというデータを示す。
→「説明の大過去」とフラッシュバックの場面で用いられる「大過去形の連鎖的用法」の存在がフランス語で大過去形の使用頻度が高い要因である。

・「説明の大過去」：物語の「背景をなす事情や理由を説明」する。

*渡邊 (2018) からの引用ではなく、発表者が見つけた実例。

該当する用法の大過去形→ゴシック体 ((2) も同様)

(1) Il y eut de l'étonnement dans les yeux de Janvier, puis il eut un léger sourire. Il **avait compris** la pensée de Maigret. (Georges Simenon, *Maigret en meublé*, 1951)

・「大過去形の連鎖的用法」：「相対的に古い段階に属している複数のことがら」を表し、逆行性がある時に語りの基調として用いられる。

(2) Évidemment, j'**avais posé** des questions aux pêcheurs, à tous ceux qui **avaient été** témoins de l'accident. Une femme **m'avait raconté** une histoire bizarre à laquelle je **n'avais pas prêté** attention sur le coup, mais qui me revint plus tard. Elle prétendait qu'au moment où elle **avait hélé** son amie, Mlle Durrant n'était pas en difficulté. D'après elle, l'autre l'aurait rejointe et lui aurait délibérément maintenu la tête sous l'eau. Comme je vous l'ai dit, je **n'avais pas fait** très attention à cette histoire. C'était si extravagant et, vues de la plage, les choses pouvaient paraître si différentes ! Mlle Barton **avait peut-être tenté** de faire perdre conscience à son amie en voyant que celle-ci allait les faire couler toutes les deux dans son affolement.

(Agatha Christie, *Le Club du mardi* cité par 渡邊, 2018)

・渡邊 (2018) の主張

「説明の大過去形」：「事態そのものは完了的であるにもかかわらず、あえて未完了相でとらえ直す」叙想的アスペクトの事例。

「大過去形の連鎖的用法」：大過去形の完了アスペクトを出発として「本動詞の事行 P から結果状態 Q に移行したということは、事行 P は Q よりも前方（過去方向）にある」ことから「語りの前景のアスペクトである全体的アスペクトに擬似的に近づく」。

◆ 岸 (2024)

同じく「大過去形の連鎖的用法」について分析した論考。

→先行性ではなく完了性で説明できるものだと主張。

→大過去形の基本の働きは「過去完了」であり、事態の生起そのものを描く単純過去形のように事態を展開することなく、大過去形の連鎖的用法も過去のある時点 t_1 に関する過去の事態を並列させるのみ

である。

→渡邊 (2018) と岸 (2024) が取り上げる実例は、どちらの用法も過去のある時点よりも先行している事態を表す。

◆ 本発表が扱う大過去形

過去における先行性や完了だけでは説明できないような用いられ方をしている大過去形も少なからずある(3)。

* (4)は比較としての英訳である。

- (3) Je n'ai jamais rien vu sur le plateau de cette balance. Sauf papa. Aux rares moments où Monsieur Casterade, son associé, était absent, papa se tenait immobile et silencieux au milieu du plateau de la balance, les mains dans les poches, le visage incliné. (...) Quelquefois, il me disait :

– Tu viens Catherine ?

(...)

Un jour, Monsieur Casterade, l'associé de papa, nous **avait surpris** sur cette balance. Qu'est-ce que vous faites là ? **avait-il demandé**. Le charme était rompu. Nous **avons remis** nos lunettes, papa et moi. – Vous voyez bien que nous nous pesons, **avait dit** papa.

Sans daigner nous répondre, il **avait disparu** d'un pas nerveux, tout au fond, derrière la paroi vitrée, là où deux gros bureaux de noyer se faisaient face avec leurs chaises pivotantes : le bureau de papa et celui de Monsieur Casterade.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 15)

- (4) I never saw anything on the scale's platform. Except for Papa. At those rare moments when his partner, Mister Casterade, was out, Papa would stand silent and still in the center of the platform, with his hands in his pockets and his head bowed. (...)

Sometimes Papa would say, "Come here, Catherine," and I would join him on the scale. (...)

One day Mister Casterade **caught** us standing on the scale. "What are you doing?" he **asked**. The spell was broken. Papa and I **put** our glasses back on. "We're weighing ourselves, can't you see?" Papa **said**.

Without bothering to reply, Casterade **trotted** briskly to the office at the back of the store. Behind a glass partition, two big walnut desks with swivel chairs faced each other: Papa's and Mister Casterade's. (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 10)

・ニューヨークに住んでいる Catherine がパリで過ごした子供時代を回想する物語。

引用部分は、Catherine が父親と一緒に住んでいた場所の階下に父親が経営している会社になっている描写を終えたところ。

複合過去形 Je n'ai jamais rien vu : 「秤の台の上に何か乗っているのを見たことがなかった」という語り手 Catherine の経験。

→この回想をきっかけに、「滅多に休まない共同経営者の Casterade が休んだ時には、父が秤の上に乗っ

ていた」こととそれに付随する思い出が半過去形で語られる。

→半過去形 *il me disait* も頻度を表す副詞 *Quelquefois* とともに用いられている。

⇒ このテキストの一連の事態は反復。

・ *Un jour* で始まる段落

「父と秤に乗った日々」の思い出の中の出来事の一つであり、おそらく一回きりの出来事と推測される。

→背景の描写には半過去形、出来事には大過去形が用いられている。

⇒ ここに現れる一連の大過去形は何に対して先行しているのか？

⇒ この後の段落に複合過去形が現れるのだが、同僚の *Casterade* が父のところで働き始めたという大過去形で語られる一連の出来事よりも前の事態であるため、大過去形の基準点になっているとは考えられない。

・ 英語版

→原文で大過去形が用いられている箇所全てが単純過去形。

→過去完了形ではなく単純過去形が用いられているのは、過去における過去を表した事態ではないから。

✓ テンスやアスペクトの観点からだけでなく、テキスト全体を分析対象とし、(3) のような先行性を表さない大過去形の働きを考察することが必要である。

◆ 本発表の目的

Patrick Modiano の *Catherine Certitude* から実例を取り上げ、(3) のような大過去形が用いられるテキスト構造と基準点に焦点を当てて分析することで、テキストにおける大過去形の働きを明らかにする。

◆ 本発表の構成

1章：時制と中心場面

2章：テキスト構造と時制の関係

3章：実例の分析

1. 中心場面

1.1. 中心場面と時制

◆ Declerck (1991)

・ 中心場面を次のように定義する。

時間の支配領域を定める場面を、その支配領域の中心場面 (*central situation*) と呼ぶ。中心場面は、その支配領域内で、唯一、別の場面に時間的に従属していない場面である。(Declerck 1991 : 119)

絶対時制：中心場面を決める時制 (単純過去形・現在完了形・現在形・未来形)

→「直接発話時に結び付けるという特徴がある」と説明する。

相対時制：中心場面に従属する場面を表す時制 (過去完了形や過去未来形など)

(5) Jim said that he was pleased that Bill had sent him a letter and that he would write a reply as soon as possible. (Declerck 1991 : 119)

中心場面：単純過去形 **said**

中心場面に従属している時制：その他の単純過去形 **was pleased**、過去完了形 **had sent** そして過去未来形 **would write**

◆ フランス語の時制と中心場面

* 複合過去形には下線を付し、半過去形にはイタリック体、大過去形にはゴシック体を用いている。

(6) Monsieur Casterade **s'est levé** en tenant une feuille à la main. C'*était* un poème qu'il **avait écrit**, en l'honneur de notre départ.

« (...) »

Nous **avons applaudi**, papa, Monsieur Chevreau et moi.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 92)

中心場面：複合過去形 **s'est levé**

中心場面に従属している時制：大過去形 **avait écrit**、半過去形 *était*

→大過去形 **avait écrit** が表す事態：中心場面に対して先行した事態。

→半過去形 *était* が表す事態：中心場面と同時の事態であることを表す。

2つ目の複合過去形 **avons applaudi**：新たな中心場面を作り、物語を前に進める。

・ 図1, 図2：(6)を図で表したもの。

→中心場面は太枠、中心場面から出ている矢印は中心場面との時間的従属関係を表す。

→ t_0 と中心場面を結ぶ太枠の矢印は現在から過去を振りかえっていることを示す。

→二つ目の複合過去形 **avons applaudi** で新たな中心場面が立てられる。

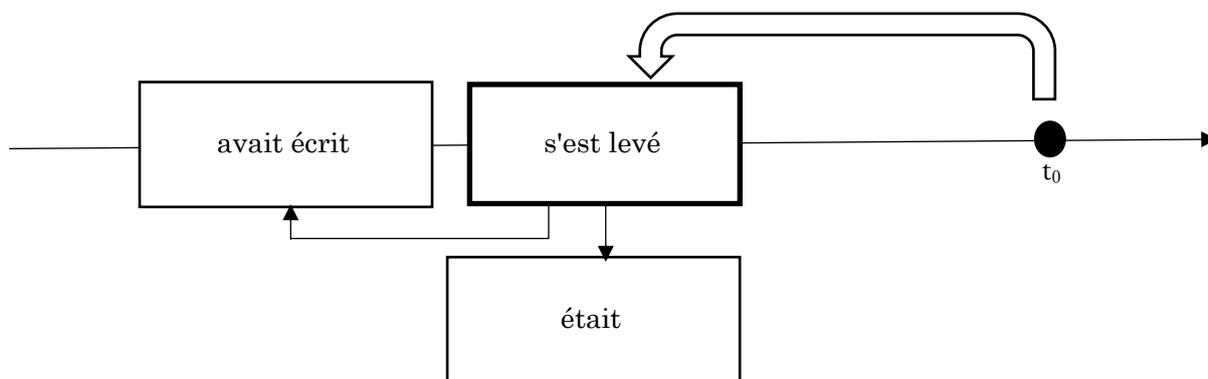


図1

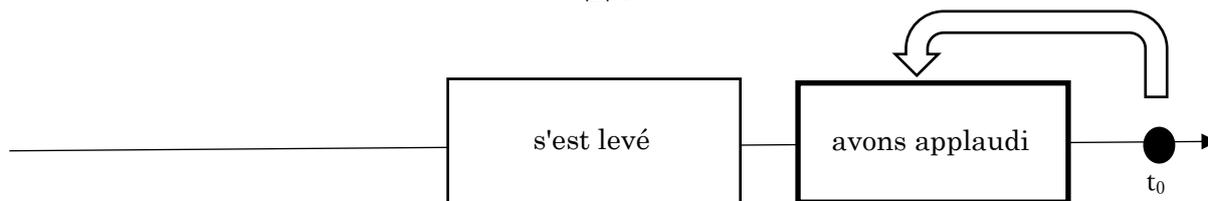


図2

✓ この図が示すように、出来事は新たに複合過去形または単純過去形が現れるまでは、同じ中心場面に従属し、時間は前に進まない。

2. テキスト構造

2.1. テキスト構造と時制

◆ Weinrich (1982)

- ・「前景」と「背景」：語りの世界において単純過去形と半過去形が持つ唯一の対立。
- ・物語を形作る3つの構成部：「導入部」「展開部」「終結部」
「導入部」で多く見られる時制：半過去形
「展開部」で多く見られる時制：単純過去形
「終結部」で多く見られる時制：半過去形などの背景を表す時制が好まれるが必然的なものではない。東郷 (2024) にも「一番多様なスタイルが見られるのは物語の終結部」であるというように記述されている。

- (7) Il *avait* rendez-vous dans la steppe avec Dieu lui-même, et il *se hâtait* lorsqu'il *rencontra* un paysan dont la voiture *était* embourbée. Alors saint Dmitri l'*aida*. La boue *était* épaisse, la fondrière profonde. Il *fallut* batailler pendant une heure. Et quand ce *fut fini*, saint Dmitri *courut* au rendez-vous. Mais Dieu n'*était* plus là.

(Camus, *Les justes* cité par Weinrich, 1982)

導入部：「 Il *avait* rendez-vous dans la steppe avec Dieu lui-même »

終結部：「 Mais Dieu n'*était* plus là. »

→共に半過去形が用いられていることを指摘。

→導入部の半過去形：「序説的な説明」であり、「語ろうとする世界を紹介し、読者あるいは聞き手を異質な世界へ誘い込」む

→終結部の半過去形：「説明された世界に属している聖人伝の教訓」から、「この語りの世界を切り離し」ている。

展開部：「 et il *se hâtait* lorsqu'il *rencontra* un paysan dont la voiture *était* embourbée » で始まる部分。

→単純過去形が頻繁に用いられるようになり、物語の出来事が進んでいく。

→半過去形：物語世界の説明や語りの世界の切り離しではなく、「付帯状況、描写、省察その他語り手が背景の中に入れておこうと考える全ての対象を記述」するために用いられている。

2.2. テキスト構造と境界表現

◆ 浜田 (2001)

「境界表現」：前景と背景の切り替えの指標のことを指す。

- (8) むかす、あつたずもな。あるとこに、かみ上のず爺としも下のず爺とあつたずもな。いつも、このかみ上のず爺としも下のず爺と、あらかたおんな同しとこさ、どっこかけてあつたずもな。あるとき、上の爺アどっこあげさ行つたずもな。そしたば、われのどっこさば木の根っこへ入つてらつたど。「こんななものきしえ」って投げたずもな。

(小澤俊夫他編『鈴木サツ 全話昔話集』福音館 cité par 浜田(2001))

「むかす」：「現実世界から離脱し、物語世界全体を導入」する。

「あるとこに」：物語全体の背景として取り上げる「巨視的背景」を導入する。

「あるとき」：ここから物語の本筋に入る。

→浜田 (2001) は、テキストはこのような表現を用いながら「巨視的背景から最前景の発話部へと物語の立体的な階層を昇るにつれ、より微細な時間的領域へと叙述が進展していく」と述べる。

◆ 境界表現を取り入れたフランス語テキストの分析

(9) : Jacques Prévert の児童書 *Contes pour enfants pas sages* に収録されている物語

→このテキストの冒頭は物語世界の全体的な説明から始まり、物語の本筋に入る時に境界表現となる *Un beau jour* が用いられている。

導入部で使用されている時制：半過去形、展開部と終結部では現在形と僅かに複合過去形が用いられている。

現在形：下線部、半過去形：イタリック。

(9) Captif, un jeune lion *grandissait*, et plus il *grandissait* plus les barreaux de sa cage *grossissaient*, du moins *c'est* le jeune lion qui le *croyait*... en réalité, on le *changeait* de cage pendant son sommeil.

Quelquefois, des hommes *venaient* et lui *jetaient* de la poussière dans les yeux, d'autres lui *donnaient* des coups de canne sur la tête et il *pensait* : “(...)”

Un beau jour : du nouveau...les garçons de la ménagerie placent des bancs devant la cage, des visiteurs entrent et s'installent.

(...)

Le dompteur a une chaise dans la main, il tape avec la chaise contre les barreaux de la cage, sur la tête du lion, un peu partout, un pied de la chaise casse, l'homme jette la chaise et, sortant de sa poche un gros revolver, il se met à tirer en l'air.

“Quoi ? dit le lion,(...)”, et sautant sur le dompteur il entreprend de le dévorer plutôt par désir de faire un peu d'ordre que par pure gourmandise...

(...)

Seul un Anglais reste assis dans son coin et répète : “Je l'avais prévu, ça devait arriver, il y a dix ans que je l'avais prédit...”

Alors, tous les autres se retournent contre lui et crient :

“Qu'est-ce que vous dites ? ...c'est de votre faute tout ce qui arrive, (...)” etc., etc.

Et voilà l'Anglais qui reçoit lui aussi des coups de parapluie...

“Mauvaise journée pour lui aussi !” pense le lion.

(Jacques Prévert, *Contes pour enfants pas sages*, 68-78)

導入部：半過去形でこの物語の前提知識となる背景を描写。

→Weinrich (1982) の「序説的な説明」に該当し、この物語の主人公となるライオンが大きく成長していることを説明している。

→*Quelquefois* 以降も同様、この物語ではこれまでライオンがどのように過ごしていたかという日々の説明であり、浜田 (2001) における巨視的背景である。

展開部： Un beau jour が、物語全体の説明の描写から前景を語る指標となる境界表現となっている。
→基本的に現在形が用いられている。単純過去形と同等の働きをしていることから、物語の現在と見なすことができる。
→ライオンを見物する人の中にいた調教師が突然檻の中に入り、混乱したライオンが調教師を襲う出来事が描かれる。

終結部：提示詞 et voilà 以降。
→展開部の終盤で一人のイギリス人が「いつかこうなると思っていた」ということで周りの人たちから糾弾され、最後はそのイギリス人もライオンと同じように傘で殴られてしまうという話で終わる。
→展開部から終結部まで時制は変わらず一貫して現在形が用いられており、時制の観点からはテキスト構造の違いは見られない。
→提示詞 et voilà によって終結部であると判断できる。

✓ テキスト構造を分析するには、境界表現となる Un beau jour のような時間副詞だけでなく間投詞などの要素も考慮に入れる必要がある。

2.3. *Catherine Certitude* のテキスト構造

◆ *Catherine Certitude* の物語構成

・ニューヨークでバレエの講師をしている語り手が、パリで過ごした子供時代を振り返る枠物語の形式を取る。

・枠の部分は「ニューヨークにいる現在」からの語りの主となり、この枠を構成する冒頭部分がそれぞれ導入部と終結部になる。

→導入部：冒頭から p.10 まで。「ニューヨークにいる現在」から主人公 Catherine が自分の現在とこれまでを振り返る。

→展開部：pp.11-93。半過去がメインの語りとなり、「パリで過ごした子供時代」の回想が始まる。この語りの部分が物語の中心部となる。

→終結部：pp.94-95。最後に再び「ニューヨークにいる現在」に戻る。

・表の4つの構成部について

本発表では3つの構成部ではなくさらに「展開部の導入」を設け4つの構成部にしている。

展開部の冒頭：パリの子供時代にあった習慣的な事柄や反復的な事柄といった子供時代の全体的な回想が半過去形を基調として描かれる。

p.38 以降の展開部：バレエを習い始めるきっかけとなるバレエ人形が届いたというエピソードから複合過去形が基調となり物語が進んでいく。

→それぞれ基調となる時制が半過去形と複合過去形と異なるテキスト構造を持っているため、展開部を「子供時代の全体的な回想」と「バレエを習い始めてからフランスを発つまでの回想」という2部構成に分けた。

→前半の「子供時代の全体的な回想」は物語が進み始める後半のための導入部であると考え、表のように

「導入部」「展開部の導入」「展開部」「終結部」の4つの構成部にした。各構成部の括弧内の数字はページ番号を表す。

時制	導入部 (9-10)	展開部の導入 (11-37)	展開部 (38-93)	終結部 (94-95)
現在形	14	15	14	2
複合過去形	9	20	171	5
半過去形	14	152	171	5
大過去形	-	42	35	-
単純過去形	-	-	2	-
未来形	1	-	3	-
条件法現在	1	-	-	-
条件法過去	-	1	1	-

◆ 各構成部の時制の分布

・「導入部」

pp. 9-10 は導入部「ニューヨークにいる現在の状況」である。主人公 Catherine が現在ニューヨークで娘と共にバレエ教室を営んでいることが描かれ、現在形が語りの基調となっている。

* 現在形と複合過去形などの絶対時制：下線、大過去形：ゴシック、その他の時制：イタリック

(10) A New York, il neige aujourd'hui et je regarde, par la fenêtre de mon appartement de la 59^e rue, l'immeuble d'en face où se trouve l'école de danse que je dirige. Derrière la baie vitrée, les élèves en justaucorps ont cessé leurs pointes et leurs entrechats. Ma fille, qui travaille avec moi comme assistante, leur montre, pour les détendre, un pas sur une musique de jazz. Tout à l'heure, j'*irai* les rejoindre.

Il y a parmi ces élèves, une petite fille qui porte des lunettes. (...) Je me souviens qu'à l'époque de Madame Dismaïlova, je *m'exerçais* pendant la journée à ne plus porter mes lunettes. Les contours des gens et des choses *perdaient* leur acuité, tout *devenait* flou, les sons eux-mêmes *étaient* de plus en plus étouffés. Le monde, quand je le *voyais* sans lunettes, *n'avait plus* d'aspérités, il *était* aussi doux et aussi duveteux qu'un gros oreiller contre lequel j'*appuyais* ma joue, et je *finissais* par m'endormir. (...)

Ici à New York, j'ai fait partie d'une troupe de ballet pendant quelques années. Ensuite, j'ai dirigé avec ma mère un cours de danse. Puis elle a pris sa retraite et j'ai continué sans elle. C'est maintenant avec ma fille que je travaille. (...) En somme, rien à dire sur nous. Des New-Yorkais comme tant d'autres. La seule chose un peu étrange c'est ceci : avant notre départ pour l'Amérique, j'ai vécu mon enfance dans le X^e arrondissement. Voilà presque trente ans de cela. (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 9-10)

一段落目と二段落目

現在形：現在 New York に住んでいる語り手 Catherine が「雪が降っている」や「建物を見ている」など目の前の状況や「バレエ教室を経営している」や「私と共に働く」などの現在の状況を描く。

三段落目

半過去形：眼鏡をかけている一人の少女に気づいたことをきっかけに Dismailova 先生のもとで語り手が眼鏡を外してバレエのレッスンを受けていたことを思い出し、その時に見える景色を描く。

四段落目

再び New York にいる現在に戻る。

複合過去形：現在に至るまでの経歴を簡単に述べ、最後にこの物語の主軸の話となる「パリに住んでいた」という事態を描く。

→この一文は「子供時代の全体的な回想」を語る「展開部の導入」に入るための用意をしている。

◇ 各段落の基調となる時制は「現在形→半過去形→複合過去形」と移っていく。

→間に半過去形で描かれる過去の回想があるがこれは現在と対比したもの。

→この導入部は一貫して「New York に住んでいる現在」から事態を捉えて描かれた現在形が基調のテキスト構造である。

・展開部の導入

pp. 11-37 は、Catherine がパリに住んでいた時の回想であり、繋がりのない断片的なエピソードを語っている。

→半過去形が最も多く、その次に大過去形が多い。

(11) Nous *habitions* au-dessus d'une sorte de magasin dont papa *baissait*, chaque soir, à sept heures, le rideau de fer. Cela *ressemblait* au local des gares de province où l'on consigne et où l'on expédie les bagages. Il y *avait* toujours des caisses et des paquets empilés les uns sur les autres. Et une balance, dont le vaste plateau, au ras du sol, *était* fait pour supporter des poids importants, puisque son cadran *indiquait* jusqu'à trois cents kilos.

Je n'ai jamais rien vu sur le plateau de cette balance. Sauf papa. Aux rares moments où Monsieur Casterade, son associé, *était* absent, papa *se tenait* immobile et silencieux au milieu du plateau de la balance, les mains dans les poches, le visage incliné. (...) Quelquefois, il me *disait* :

– Tu viens Catherine ?

Et j'*allais* le rejoindre sur la balance. Nous *restions* là, tous les deux, les mains de papa sur mes épaules. Nous *ne bougions pas*. Nous *avons* l'air de prendre la pose devant l'objectif d'un photographe. J'*avais ôté* mes lunettes, et papa *avait ôté* les siennes. Tout *était* doux et brumeux autour de nous. Le temps *s'était arrêté*. Nous *étions* bien.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 13–14)

一段落目

ほとんど半過去形が用いられている。

半過去形：半過去 *baissait* はパリに住んでいた頃の習慣的な事柄を表す。他の半過去形は当時の状態的な事態を描く。

二段落目

複合過去形 *n'ai jamais rien vu* は語り手 Catherine の経験。

半過去形：反復した事態。

3つの大過去形 (*avais ôté, avait ôté, s'était arrêté*)：父と語り手が秤に乗った時にはすでに完了状態であった事態を表す。半過去形と同様、繰り返し行われていた事態である。

◇ 「展開部の導入」では、一部個別の事態を表す複合過去形も現れるが、ほとんどが上の例に示したような子供時代の繰り返しや習慣的な事態を描いたものがほとんどである。

・展開部

pp. 38-39 からバレエ教室に通い始め、物語が本格的に始まる。「展開部の導入」では子供時代によくあった思い出を語っており、ここまでは浜田 (2001) における巨視的背景に分類される描写であった。

→基調となる時制は半過去形から複合過去形に変わる。

→*Un dimanche* は、「子供時代によくあった思い出」という Catherine の全体的な思い出から個別の事態への切り替わりを示す境界表現である。

(12) *Un dimanche, nous prenions* notre petit déjeuner quand nous avons entendu la sonnerie du magasin. J'ai aidé papa à lever le rideau de fer. Un grand camion bâché, qui *portait* des inscriptions en espagnol, *était* garé devant le magasin et trois hommes *commençaient* à le décharger en posant les caisses sur le trottoir. Papa leur a fait transporter les caisses à l'intérieur et il a téléphoné à la pension de famille où *habitait* Monsieur Casterade. Les trois hommes ont rendu un reçu à papa. Il l'a signé et le camion est reparti dans un ronflement de moteur.

Papa et Monsieur Casterade ont ouvert les caisses. Elles *contenaient* des statuettes de danseuses classiques. (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 39)

複合過去形：出来事を表し、物語の時間を進めている。

半過去形 *prenions*：中心場面は複合過去形 *avons entendu*。この複合過去形との同時性を表し、「チャイムが鳴ったとき、朝食をとっていた」という進行中の事態を表す。

他の半過去形 *portait, était garé, commençaient*：トラックにスペイン語の表記があったこと、店の前に駐車されていたこと、荷下ろしを始めつつあったことというその時の状況を描く。

→複合過去形 *ai aidé* を中心場面とし、同時性を表す。

二段落目にある半過去形 *contenaient*：父と Casterade がケースを開けた時に箱の中に入っていたということを表す。複合過去形 *ont ouvert* に対して従属関係にある。

◇ 「導入部」と「展開部の導入」の半過去形：過去の一時期全体における反復や習慣であり、巨視的背景にあたる。

「展開部」の半過去形：個別の出来事との同時性を表す。

→ 浜田 (2001) における時間を「部分的に取り上げる『微視的背景』」に該当する。

→ 同じ時制でも巨視的背景と微視的背景とで質的に異なる半過去形が用いられていることが確認できる。

・「展開部」の終盤で、視点は New York に住んでいる現在に戻る。

(13) – Bientôt nous serons dans le Nouveau Monde... The New World... Mais, comme le dit Casterade, il ne faut pas oublier la France...

Sur le moment, je n'ai pas prêté grande attention à cette remarque.

C'est aujourd'hui, après toutes ces années, qu'il me semble l'entendre, distinctement, comme si j'étais encore l'enfant de cet après-midi-là, square Saint-Vincent-de-Paul.

Je pense souvent à mon école, rue des Petits-Hotels, au square où je jouais avec mes camarades dans la poussière des après-midi d'été, à notre magasin et à la balance sur laquelle nous nous pesions, papa et moi. Je pense à Monsieur Casterade qui nous lisait ses œuvres. Et aussi à Madame Dismailova dont je n'aurai jamais entendu la vraie voix.

Nous restons toujours les mêmes, et ceux que nous avons été, dans le passé, continuent à vivre jusqu'à la fin des temps. Ainsi il y aura toujours une petite fille nommée Catherine Certitude qui se promènera avec son père dans les rues du X^e arrondissement, à Paris.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 93)

一・二段落目

Sur le moment の一文までは、語り手 Catherine の幼少期の回想である。父の「フランスのことを忘れるな」という言葉は幼少期の語り手はピンときていなかったことを語っている。

三段落目以降

New York にいる現在へと視点は戻り、大人になった現在の Catherine が今もパリで過ごした思い出の場所、父と共同経営者であった Casterade やバレエの先生などお世話になった人のことを懐かしんでいる。

半過去形 *jouais, pesions, lisait* : これまでにすでに語られた過去に繰り返しあったことを表す。

四段落

語り手たちは変わらず、パリに住んでいた自分もまたこれからもずっと思い出の中で生き続けることを現在形と未来形を用いて描く。

◇ 現在形が基調になっているが、これまでのパリでの子供時代の出来事を振り返って、そこで過ごした日々が自分にとって大切な思い出であると総括しているため「展開部」に該当する。

・ 終結部

場面は現在のニューヨークに移り、物語を締めくくる。

(14) Hier dimanche, avec ma fille, j'ai rendu visite à mes parents, du côté de Greenwich Village. Ils se sont réunis une fois pour toutes, bien que maman ait souvent menacé de s'en aller, car elle *était* lasse des « combines de papa » – comme elle le *disait* avec son accent américain. Mr Smith, le nouvel associé de papa, qui est aussi tatillon que l'*était* Monsieur Casterade, partage entièrement l'avis de maman.

Le taxi nous a déposées au pied du grand immeuble de brique où ils habitent. Là-haut, à l'une des fenêtres de leur appartement, j'ai distingué la silhouette de papa. Il m'a semblé qu'il *nouait* sa cravate. Peut-être *disait*-il :

– A nous deux, Madame la vie. (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 95)

(13) の aujourd'hui は語り手の現在へと戻り、今もよくパリで過ごした日々のことを思い出すといった現在の反復を表す巨視的背景でもあった。

一段落目

(14) の冒頭の Hier dimanche : 巨視的背景から個別の事態への移行を表す境界表現。

→語り手の Catherine が語る時点を発話時点 t_0 とし、そこから前日の出来事を語っている。

複合過去形 se sont réunis : 父と母が一緒にいることになったという完了状態を表す。

現在形 est, partage : 現在の状況を表す。現在の父の同僚がかつての同僚 Casterade と同じくらい神経質であることや母の意見に完全に同意するといったことを描く。

半過去形 était : 現在の同僚との対比を表す。

二段落目

半過去形 nouait, disait : 複合過去形 a semblé に対して同時性を表し、従属関係にある。

→「微視的背景」を表す半過去形である。

以上が、*Catherine Certitude* のテキスト構造である。本発表で扱う大過去形が現れるのは主に第 2 部の「展開部の導入」である。

3. 大過去形の分析

3.1. 回想場面において先行性を表さない大過去形のテキスト構造

次の (15) の分析対象となる大過去形は、(11) の後に現れる。

(15) Je n'ai jamais rien vu sur le plateau de cette balance. Sauf papa. Aux rares moments où Monsieur Casterade, son associé, *était* absent, papa *se tenait* immobile et silencieux au milieu du plateau de la balance, les mains dans les poches, le visage incliné. (...) Quelquefois, il me *disait* :

– Tu viens Catherine ?

Et *j'allais* le rejoindre sur la balance. Nous *restions* là, tous les deux, les mains de papa sur mes épaules. Nous *ne bougions pas*. Nous *avons* l'air de prendre la pose devant l'objectif d'un photographe. J'*avais ôté* mes lunettes, et papa *avait ôté* les siennes. Tout *était* doux et

brumeux autour de nous. Le temps **s'était arrêté**. Nous *étions* bien.

Un jour, Monsieur Casterade, l'associé de papa, nous **avait surpris** sur cette balance. Qu'est-ce que vous faites là ? **avait-il demandé**. Le charme *était* rompu. Nous **avons remis** nos lunettes, papa et moi. – Vous voyez bien que nous nous pesons, **avait dit** papa.

Sans daigner nous répondre, il **avait disparu** d'un pas nerveux, tout au fond, derrière la paroi vitrée, là où deux gros bureaux de noyer *se faisaient* face avec leurs chaises pivotantes : le bureau de papa et celui de Monsieur Casterade.

C'est après le départ de maman que Monsieur Casterade a commencé de travailler avec papa. Maman est américaine. A vingt ans, elle *appartenait* à une troupe de danseuses, venues en tournée à Paris. (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 14-15)

1 段落目

- ・経験用法の複合過去形が一つ用いられ、以降は反復や習慣の半過去形と大過去形で描かれる。
- 巨視的背景に分類される事態を描く。

2 段落目

- ・境界表現 Un jour : 個別の出来事が始まる。巨視的背景から個別の事態への変化を表す。
- Un jour 以降は大過去形と半過去形で語られる。
- 出来事 : 大過去形、背景の描写 : 半過去形

◆ 先行性を表さない大過去形

- ・複合過去形 *a commencé* を含め、大過去形が何に対して従属関係を表すのか明らかではない。
- ・個別の事態を述べる場合は通常、単純過去形や複合過去形が用いられる。

実際、インフォーマントによると、この一連の大過去形は単純過去形や複合過去形に置き換えても物語としては成立するが以下のような違いがある。

- ✓ 単純過去形や複合過去形 : 「メインの語り (récit principal)」

中心場面を設定する絶対時制である単純過去形や複合過去形は語りにおいて前景を表し物語の時間を進める働きをもつため、「メインの語り」として伝わる。

- ✓ 大過去形 : 副次的な物語 (histoire secondaire)」

「副次的な物語」として伝わるのは、大過去形が相対時制であり中心場面に従属する時制であるため、物語の時間を進める働きがないということに関連する。

・大過去形は基本的に中心場面に対して完了状態にある事態や、中心場面にかかわる先行する事態を表し、半過去形と同じく背景的な事柄を表す時制であるが、(15) では大過去形と半過去形で前景と背景の役割を分担している。

(15) の Un jour 以降の大過去形 : *avait surpris*, *avait demandé*, *avait dit*, *avait disparu* の順で出来事を進める。

半過去形 *était rompu* : Casterade が声をかけてきたことにより魔法がとけた状態

半過去形 *se faisaient* : 大きな机が向かい合っているという情景を描く。

- ✓ (15) で用いられる大過去形で表される事態は単なる背景ではなく、主軸となる物語の時間を進めずに回想の中の出来事を描くという擬似的な前景の働きをしている。
 - ⇒ 「副次的な物語」と表現された理由。
 - ⇒ 先行性を表さないこの大過去形を「擬似的前景を表す大過去形」と呼ぶ。

◆ (15) のテキスト構造

このテキスト構造は、「時々父と秤に乗った過去」という回想の中に、時の副詞 *Un jour* で始まる過去の記憶が埋め込まれた入れ子構造¹になっている (図3)。



図3

- ・この2段落目は、原文では p.14 でいったんエピソードが終わる形となっており、p.15 から新たなエピソードが *Un jour* で始められる形になっている。
 - *Un jour* で始められる新たなエピソードが、前ページで語られた思い出のある日の出来事だと認識できるため、「時々父と秤に乗った過去」を一番外側にした入れ子構造になっていると解釈する。
 - 「時々父と秤に乗った過去」のような外枠を、ここでは「統括テーマ²」と呼ぶ。

◆ 先行性を表さないこの大過去形の中心場面はどこか？

大過去形と中心場面の基本的図式：大過去形は中心場面と時間的従属関係にあり、1.1.で示した図1の大過去形 *avait écrit* と複合過去形 *s'est levé* のような前後関係で示される。

- ・(15) は図3のように境界表現 *Un jour* が開く過去空間に大過去形が内包される形となっている。
 - 図1と大きく異なっている。

¹ 大過去形が「入れ子構造」で語られる場面において前景的な出来事を表すことについては渡邊 (2018) で既に取り上げられている。しかし、渡邊 (2018) が取り上げるこの大過去形は「はじめに」の (2) のような過去のある時点よりも前に起こった継起的な事態を表しており、「先行性」という大過去形の基本的機能は活きている。一方、本発表が取り上げる「入れ子構造」は (15) のように過去の一時期の全体的な回想の中に包含される思い出となっており、全体的な回想と思い出は時間的前後関係にはなく、本文中に論じたように本発表で分析対象となる大過去形は「完了性」や「先行性」を表さない。したがって、渡邊 (2018) における「入れ子構造」において現れる大過去形と本発表で取り上げる「入れ子構造」に現れる大過去形は本質的に異なるもの。

² 「統括テーマ」という用語は、井上 (2001) の「統括主題」から着想を得たものである。ただし、井上 (2001) では本発表で扱うようなあるひとまとまりのテキストのテーマとして用いられておらず、次のように、最初にテーマとなる一文があり、これが「統括主題」となって次の文の「なくなっている」に関係しているという。詳しくは井上 (2001) を参照されたい。

(1) このところ世界各国で著名人が相次いでなくなっていますが、日本では、現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる2月20日になくなっています。(井上 2001)

→統括テーマと入れ子構造にある「副次的な物語」における事態を表すことを必要とするという特殊なテキスト構造である。

・この特殊性によって大過去形の基本的機能である「過去のある時点における先行性・完了性」がキャンセルされる。

→大過去形が本来必要とする中心場面との時間的従属関係はなくなる。

→境界表現 *Un jour* が作る時間的枠組みにおいて大過去形は擬似的前景を表すことができる。

◆ 視点³

・大過去形の助動詞である半過去形の内的視点により、視点は物語の中に留められる。

→*Un jour* が一時的に擬似的現在となり、「過去における現在」と表されることもある半過去形が基調となる。

→視点は常に *Un jour* にあり、そこで起こる事態を *Un jour* の中から捉える。

→この大過去形は単に「副次的な物語」として表すだけでなく、読み手に語り手 Catherine と共に思い出を追体験するという効果を与える。

◆ (15) のテキスト構造と擬似的前景を表す大過去形の使用の特徴

- A) 「時々父と秤に乗った過去」のエピソードと境界表現 *Un jour* 以降で語られるエピソードは入れ子構造になっている。
- B) 境界表現以降では *Un jour* が擬似的な現在となり、半過去形が基調となる。
- C) このテキストで用いられる大過去形は、「メインの語り」という主軸となる物語の時間を進める事態ではなく、主軸となる時間を進めない「副次的な物語」における擬似的前景を表す。
- D) 大過去形の助動詞である半過去形の内的視点によって、視点を変えずに物語の内側から事態を眺めることになる。結果、語り手の思い出を追体験しているような感覚を伴う。

3.2. 類例の分析

(16) *Je restais* deux fois par semaine à la cantine de l'école, et les autres jours je *déjeunais* avec papa dans un restaurant du quartier, rue de Chabrol : « Le Picardie ». Monsieur Casterade y *déjeunait* lui aussi. Nous le *guettions*, au coin de la rue, et nous *attendions* une dizaine de minutes après qu'il **était entré** dans le restaurant pour ne pas nous asseoir à la même table que lui. (...)

(...)

Souvent, ceux avec qui il *traitait* des affaires *venaient* le retrouver à la fin du repas et *s'asseyaient* à notre table.

Je les *écoutais* parler mais je ne *comprenais* pas tout ce qu'ils *disaient*. Des hommes bruns avec des moustaches et de vieux pardessus. Il y *avait* aussi, parmi eux, un roux aux lunettes à monture d'or, qui *écoutait* papa, bouche bée. Je me souviens que celui-là *s'appelait* Chevreau.

³ 本発表の視点は、話し手および読み手の視点を表す。

Un jour, papa lui **avait dit** :

– Alors, Chevreau, ça vous intéresse, cinquante sièges d’avion Constellation ?

Chevreau **avait écarquillé** les yeux.

(...)

Chevreau *considérait* mon père, bouche bée, comme à son habitude.

(...)

Je *lisais* tant d’admiration pour papa dans les yeux de Monsieur Chevreau que, moi aussi, j’*étais* épatée. Quel *pouvait* bien être le métier de papa ? Je le lui ai demandé un après-midi :

– Comment t’expliquer, ma chère ? Pour faciliter le trafic des marchandises à travers l’Europe, (...)

Il **avait aspiré** une grande bouffée de cigarette.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 26-30)

Un jour までの段落

繰り返し行われていた習慣的な事柄「父と La Picardie で昼食を取る」が述べられている。

半過去形：全て習慣や反復を表す。

大過去形 *était entré*：主節の半過去形 *attendait* と合わせて「彼 (=Casterade) がレストランに入ってから私たちは 10 分ほど待った」という繰り返された事態を表す。

Un jour 以降

時の副詞 *Un jour* が境界表現となり、ここから個別の出来事の描写に移行する。

大過去形 (*avait dit, avait écarquillé, avait aspiré*)：前景的な事態を表す。

半過去形：進行中や状態を表す

→ (15) と同じ入れ子構造のテキスト構造。

外枠：「父と La Picardie で昼食を取る」という思い出 (=統括テーマ)

内枠：ある日の出来事「父が友人 Chevreau に声をかけた日」

→複合過去形 *ai demandé*：語り手 Catherine が父の仕事について尋ねた時に複合過去形 *ai demandé* になっているのは、一時的に語っている現在から振り返っているため。

・英語版では、フランス語原文で問題となる大過去形の箇所全てが単純過去形。

→フランス語の大過去形が過去における先行性を表したのではないためである。

次の例は先行性を表す大過去形とみなすこともできるが、やはり (16) と同じように擬似的前景を表す大過去形である考える。

(17) A droite de la photo, on distingue une femme qui, peu à peu, a éveillé chez moi un vague souvenir. Un soir, elle *se trouvait* dans le bureau de papa, et je **l’avais entendue** dire, en partant :

– A très bientôt, Georges.

J’avais demandé à papa qui elle *était* exactement. Papa *semblait* embarrassé.

– Oh, rien... C’est une hôtesse de l’air... (Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 50-51)

(18) On the right of the photo, you can just make out a woman; I've only recently started to remember her. One evening, she was in Papa's office and as she was leaving I **heard** her say: "I'll see you soon, Georges."

I **asked** Papa who she was. He seemed embarrassed.

(Patrick Modiano, *Catherine Certitude*, 33)

New York にいる大人になった Catherine が一枚の写真を見つけ、写真の右側にいる女性をきっかけにその女性に関する記憶を思い出す場面である。

・複合過去形 *a éveillé* により「思い出が蘇った」ことを描き、時の副詞 *Un soir* 以降でどんな思い出だったのかを語る場面である。

半過去形：ある夜の思い出の中に視点を置き、思い出の中からそこで起きたことを捉え、女性が立っていたことや父が狼狽していたなどのような状況の描写

大過去形：前景的な事態

→統括テーマは「写真に写っている女性との漠然とした思い出」であり、そこに関連づける形で *Un soir* が入れ子構造として埋め込まれている。

・英訳の方では、フランス語のような統括テーマとの入れ子構造的なテキスト構造にはなっていない。

→この写真を見つけたのは大人になった Catherine であるが、時間副詞 *One evening* から当時の写真の女性に関係する思い出であることは明らか。

→独立したエピソードとして単純過去形が用いられている。

◆ Michelle Obama 著の *Becoming* とその仏訳 *Devenir* からの引用。

(19) はオバマ夫人の両親の教育にまつわる一つのエピソードを紹介する場面である (Craig はオバマ夫人の兄である)。

(19) Ils n'ont jamais cherché à édulcorer ce qu'ils considéraient comme les dures réalités de la vie. Un été, par exemple, Craig **avait reçu** un nouveau vélo qu'il **avait enfourché** pour aller au lac Michigan, à l'est, sur le sentier pavé qui longeait Rainbow Beach, où l'on *pouvait* sentir la brise qui *venait* de l'eau. Il **n'avait pas tardé** à se faire arrêter par un agent de police qui **l'avait accusé** de vol, n'envisageant pas une seconde qu'un jeune Noir ait pu se procurer un vélo neuf par des moyens honnêtes (l'agent, lui-même afro-américain, s'est ensuite fait passer un sacré savon par ma mère, qui l'a obligé à présenter ses excuses à Craig). Cet incident, nous ont expliqué mes parents, était injuste, mais malheureusement fréquent. La couleur de notre peau nous *rendait* vulnérables. Nous *devrions* faire avec durant toute notre vie.

(Michelle Obama, *Devenir*, 57-58)

(20) They also never sugarcoated what they took to be the harder truths about life. Craig, for example, **got** a new bike one summer and **rode** it east to Lake Michigan, to the paved pathway along Rainbow Beach, where you could feel the breeze off the water. He'd **been promptly picked** up by a police officer who **accused** him of stealing to, unwilling to accept that a young Black boy would have come across a new bike in an honest way. (The officer, an African

American man himself, ultimately got a brutal tongue-lashing from my mother, who made him apologize to Craig.) What had happened, my parents told us, was unjust but also unfortunately common. The color of our skin made us vulnerable. It was a thing we'd always have to navigate. (Michelle Obama, *Becoming*, 25)

複合過去形 *n'ont jamais cherché à édulcorer* で「両親は厳しい現実もしっかり伝えようとした」ということを述べた後で、それにまつわるエピソードが一つ例として挙げられる。

・複合過去形 *ils n'ont jamais cherché* がこのテキストの統括テーマ「両親は厳しい現実もしっかり伝えようとした」となり、そこに境界表現となる時間副詞 *Un été* によって特定のエピソードが埋め込まれた入れ子構造になっている。

大過去形：前景的な事態

半過去形：背景的な事態

・複合過去形が基調となるテキストの中に大過去形が現れているように見える。

→この複合過去形は統括テーマであり、入れ子構造の外枠の部分である。

→入れ子構造の内枠部分は、これまでの例と同様に *Un été* によって時間的枠組みを設定。

→そこを擬似的現在とし背景的な事態には半過去形、前景的な事態には大過去形が用いられているため、他の例と同様、半過去形が基調のテキストの中で用いられているといえる。

・英訳では、イタリックを付した *He'd been promptly* のみが過去完了形になっている。

→これは関係節に出てくる単純過去形 *accused* に対して先行した事態であることを示す。

・*one summer* 以降の他の事態は単純過去形 *sugarcoated* が表すテーマに含まれる事態であって、先行はしていない。

→*for example* によって「両親に与えられた教育」というテーマに関連したテキストであることは明らかであるため、過去完了形を用いる必要がない。

3.3. 擬似的前景を表す大過去形のテキスト構造

◆ 回想場面における前景的な出来事を表す大過去形の役割

・物語の主軸となる「メインの語り」に属する出来事ではなく、過去のある一時期全体に含まれる思い出の一つとして語られる「副次的な物語」として出来事を表す。

→前景的な事態を描く時制が複合過去形または単純過去形であるか、それとも大過去形であるかといった時制形式によって「メインの語り」と「副次的な物語」というそれぞれのテキストタイプが描き分けられている。

◆ 大過去形がなぜ擬似前景を表すのか？

・本来、大過去形は中心場面に対して先行性や完了性を表す相対時制であり、基本的には前景を表すことはない。

→(15)、(16) のどちらも *Un jour* で個別化された思い出の中の前景的な事態は大過去形、進行中や状態など背景的な事態には半過去形と明確に時制が使い分けられていた。

→それぞれあらかじめ半過去形で語られる幼少期の繰り返された思い出を統括テーマとし、その中で特

に印象的だった「ある日」の出来事を語る。

→この時、すでに述べたように前景的な事態に複合過去形や単純過去形を用いると「メインの語り」の事態であることを表し、物語の主軸の事態として解釈されてしまうため、半過去形と大過去形のどちらかが前景的な事態を表すことになる。

→完了アスペクトを持つ大過去形の方が輪郭のある個別的な事態を表すのに適している。

・春木 (2014) も「擬似的前景」と表現していないものの、完了アスペクトという特性から拡張的に大過去形の前景化の効果が得られることを認めている。

もともと複合時制は対になる単純時制に対して、アスペクト的に完了的な事態を表わす場合は単純時制が表わす事態に対して時間軸上の継起的な事態を表わすことができる。(…)つまり、大過去が本来持っているアスペクト的に過去における完了した事態を表わすという性格が、継起的な事態の前景化を表わすという機能を拡張的に獲得する出発点にあったと考えられる。(春木 2014: 39)

春木 (2014) では、Le Clézio の全編半過去形という特殊なテキストや単純過去形や複合過去形が基調となるテキストに現れる先行性を表さない大過去形を扱っている。

→本発表で分析対象となる回想の半過去形で語られるテキスト類型とは異なる。

→大過去形は本発表で扱ったテキストも含め、ある種のテキストでは大過去形の完了アスペクトという特徴が先行性を表さない大過去形の前景化の一端を担っているといえよう。

◆ 半過去形が基調となる回想場面において擬似的前景を表す大過去形とそのテキスト構造は次の6つの特徴にまとめられる。

- A) 統括テーマと入れ子構造の関係になっているエピソードが境界表現 *un jour, un soir* によって導入される。
- B) 境界表現となる時間副詞が擬似的な現在となり、半過去形が基調となる。擬似的前景を表す大過去形は、半過去形が基調となる境界表現以降のテキストにおいて現れる。
- C) 複合過去形や単純過去形で前景的な事態を表す場合、「メインの語り」として物語の主軸となる出来事を表すが、大過去形は物語の時間を進めない「副次的な物語」の出来事を表す。
- D) 中心場面に対して先行性・完了性を表すという大過去形の基本的な機能はテキスト構造によってキャンセルされ、事態を完結相として描く。
- E) 大過去形が擬似的前景を表すことができるのは、大過去形の持つ完了アスペクトという特徴が拡張的に解釈されることによる。
- F) 大過去形の助動詞である半過去形が持つ内的視点から、大過去形で語られるこの回想場面は、語り手と共に過去の記憶を追体験しているような感覚を伴う。

4. おわりに

◆ 本発表の目的

(3) のような回想の半過去形の中に埋め込まれた先行性を表さない大過去形が用いられる仕組みを明らかにすること。

・中心場面と境界表現、統括テーマという3つの概念を用いた。

・本発表で研究対象となった大過去形は、統括テーマと入れ子構造の関係にある半過去形が基調となる回想場面において現れ、物語の主軸となる「メインの語り」ではなく「副次的な物語」の出来事として擬似的前景を表していることが確認された。

→大過去形が完了性や先行性を表さず擬似的前景を表すのは、入れ子構造の内枠の部分を導入する時間副詞と時間的前後関係ではなく内包関係にある。

→テキスト構造の特殊性から大過去形の基本的機能である完了性と先行性はキャンセルされる。

・大過去形の助動詞である半過去形の内的視点により、この時の視点は時間副詞で導入された時点に留められ、読み手はここで描かれる事態を語り手とともに追体験するような効果を持つ。

→これらのことは、単に大過去形を過去における先行性を表す時制として捉えては解決できず、より大きなテキスト構造という観点から大過去形の役割を捉えることで分析可能な用法である。

◆ 今後の課題

本発表が取り上げた大過去形は子供の頃の思い出という統括テーマに従属する回想場面を描くといった特殊なテキストであった。

→春木 (2014) が取り上げたような大過去形も含め、本発表で示した特徴が他の先行性を表さない大過去形も説明できるのか、検討する必要がある。

参考文献

井上優 (2001) 「現代日本語の『タ』—— 主文末の『…タ』の意味について ——」 つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房。

小熊和郎 (2018) 「フランス語大過去Ⅲ — アガサ・クリスティ『火曜クラブ』英・西・伊・伯・葡語との対照 —」 山村ひろみ (編) 『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクトの対照研究』科研費報告書 CDR, 九州大学。

河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社。

岸彩子 (2024) 「大過去の視点：単純過去と比較して」 『埼玉女子短期大学研究紀要』 49, 155-182.

東郷雄二 (2010) 「談話情報管理から見た時制—単純過去と半過去—」 『フランス語学研究』 44, 15-31.

東郷雄二 (2012) 「時制と談話構造—単純過去と半過去—」 『フランス語学研究』 46, 51-67.

東郷雄二 (2018) 「談話の観点から見たフランス語の時制—大過去を中心に—」 平成 30 年度 関西学院大学大学院「フランス文献研究 1」講義ノート。

東郷雄二 (2024) 「テキスト構造と時制—Structure textuelle et temps verbaux—」 令和 6 年度 関西学院大学大学院「フランス文献研究 1」講義ノート。

浜田秀 (2001) 「物語の四層構造」 『認知科学』 8-4, 319-326.

春木仁孝 (2014) 「フランス語の時制と認知モード 時間的先行性を表わさない大過去を中心に」 春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線2』ひつじ書房, 1-44.

渡邊淳也 (2018) 「フランス語大過去形の特徴的用法について」 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』 33 (筑波大学), 81-113.

Barcélo, G. J. et J. Bres. (2016), *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.

Benveniste, É. (1966), *Problèmes de linguistique générale* 1, Paris, Gallimard. (岸本通夫他訳 (1983))

『一般言語学の諸問題』 みすず書房)

- Benveniste, É. (1974), *Problèmes de linguistique générale* 2, Paris, Gallimard. (阿部宏他訳 (2013) 『言葉と主体—一般言語学の諸問題』 みすず書房)
- Bres, Jacques. (2007), “Et plus si *affinité*... Des liaisons entre les instructions du plus-que-parfait et les relations d’ordre temporel”, De Saussure, L. et al. (eds) *Cahiers Chronos* 18, Amsterdam, Rodopi, 139-157.
- Combettes, B. (2008), “Cohérence discursive et faits de langue : le cas du plus-que-parfait”, *Verbum* 30-2/3, 181-197.
- Declerck, R. (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha Co. (安井稔訳 (1995) 『現代英文法総論』 開拓社)
- Touratier, C. (1996), *Le système verbal français*, Paris, Masson & Armand Colin.
- Weinrich, H. (1971), *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, Stuttgart, W. Kohlhammer GmbH. (脇坂豊他訳 (1982) 『時制論 文学テキストの分析』 紀伊國屋書店)
- Weinrich, H. (1976), *Sprache in Texten*, Stuttgart, Klett Verlag. (脇坂豊他訳(1984) 『言語とテキスト』 紀伊國屋書店)
- Wydro, B. (2010), “Le plus-que-parfait – Expression d’antériorité et / ou d’accompli ?Essai d’analyse contrastive”, *LINGUA POSNANIENSIS* LII (1), The Poznań Society for the Advancement of the Arts and Sciences, 181-197.